記憶の衰え自覚尺度についての検討

メタ記憶における記憶の自信度尺度 (MSSC) との関連性について

○島内 晶¹・佐藤眞一²・西村昭徳³(非会員)

(¹群馬医療福祉大学社会福祉学部・²大阪大学大学院人間科学研究科・³東京成徳大学応用心理学部)

キーワード: メタ記憶, 記憶の失敗, 記憶の衰えの自覚

A study of the Subjective Memory Decline Scale (SMDS)

Aki SHIMANOUCHI¹, Shinichi SATO² and Akinori NISHIMURA^{3,*}

(¹Gunma University of Health and Welfare., ²Osaka University., ³Tokyo Seitoku University)

Key Words: metamemory, memory error, subjective memory decline

目 的

一般的に、高齢期になると、記憶の失敗経験が多くなることが知られている。それに伴い、記憶力が悪くなった、記憶に自信がないなど、自分自身の記憶に対して否定的な認識を持つようになると考えられる。しかし、発表者らが、行動レベルで記憶の主観的自信度 (メタ記憶) を測定できる尺度 (以下, MSSC; Shimanouchi & Sato, 2009, 島内, 2012) を用いて、高齢者と若年者のメタ記憶における記憶の自信度を比較検討したところ、高齢者の方が若年者に比べて、記憶に対する自信度が高い (島内・佐藤, 2009) ことが示されている。

また、高齢者は、家族や友人から、記憶の失敗経験を繰り返し指摘されることも増えると考えられる。しかし、自分が指摘された記憶の失敗経験について、高齢者本人がその誤りそのものを認識していない可能性があるため、高齢者の精神的健康にネガティブな影響を与える可能性がある。なお、こうした他者からの指摘が、高齢者の記憶の自己認識 (メタ記憶) にどのような影響を与えるのかについては、従来、検討がなされていない。これらのことから、本研究では、まず、メタ記憶における「記憶の衰えの自覚」に着目して尺度開発を行い、次に作成された尺度と MSSC との関連についても検討を行うこととする。

方 法

調査対象者 対象者は、20代 (25.33±2.94 歳), 30代 (34.89±2.82 歳), 40代 (43.99±2.82 歳), 50代 (53.55±2.89 歳), 60代 (64.27±2.75 歳), 70代 (72.82±2.55 歳), 80代 (80~84 歳; 81.28±1.38 歳) の各 104 名, 合計 728 名のサンプルを得た。各年代の男女は、52 名ずつであった。本調査は、調査会社に委託し、Web 上にて調査を実施した。

質問紙 メタ記憶の中でも、記憶の衰えに対する自覚を測定する「記憶の衰え自覚尺度 (以下, SMDS)」を作成し用いた。尺度は、12 項目からなり、各項目に対して、よくある (4 点), たまにある (3 点), あまりない (2 点), まったくない (1 点) の内、あてはまるものを一つ選んでもらう形式であった。また、記憶の自信度に関しては、MSSC (15 項目, 4 件法) を用いた。

倫理的配慮 本調査は、群馬医療福祉大学研究倫理審査委員会の承認 (No.14A-23) を得て実施した。なお、対象者には、調査についての説明文書を提示し、同意が得られた方のみ、回答していただいた。

結 果

SMDS12 項目の探索的因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行った。その結果、スクリープロットから 1 因子構造、または 2 因子構造の可能性が考えられた。2 因子構造の場合、第 1 因子は、「記憶力が以前と比べて低下してきたと感ずることがある」、「これまでと比べて、何かに集中して取り組むのがおっくうになったと感ずる」といった 5 項目からなり、「記憶の衰え感」に関連した因子であると考えられた。第 2 因子は、

「話をしていると自分の体験した話だったか、別の人が体験した話だったか混乱することがある」、「物を探しているうちに何を探しているのか分からなくなることがある」といった 7 項目からなり、「記憶の失敗感」に対しての因子であると考えられた。2 因子の因子間相関は、.643 であった。

項目分析の結果、フロアー効果が疑われる項目が 1 項目あったが、第 2 因子に対して高い負荷量を示していたため、因子構造上意味がある項目として、除外せずを用いることとした。

また、1 因子構造の場合、クロンバックの α 係数=.885 であり、I-T 相関は .46~.67 であった。2 因子構造の場合、記憶の衰え感因子は、クロンバックの α 係数=.832, I-T 相関は

.58~.66 であり、記憶の失敗感因子は、クロンバックの α 係数=.843, I-T 相関は.53~.67 であった。

探索的因子分析の結果をもとに、確認的因子分析を行った。1 因子構造の適合度指標の値は、GFI=.91, AGFI=.86, RMSEA=.09 であった。2 因子構造の適合度指標の値は、GFI=.94, AGFI=.91, RMSEA=.08 であった。これらの結果から、2 因子構造の方がデータのあてはまりが良いことが確認された。

MSSC と SMDS の関連性を検討するため、相関係数を算出したところ、記憶の衰え感因子との間に $-.63(p<.01)$ 、記憶の失敗感因子との間に $-.76(p<.01)$ の相関がみられた。さらに、MSSC を従属変数とする重回帰分析を行ったところ、記憶の衰え感因子 $\beta=-.28(p<.001)$ 、記憶の失敗感因子 $\beta=-.59(p<.001)$ であった。

考 察

今回作成した SMDS の第 1 因子である「記憶の衰え感」は、過去の自分と現在の自分とを比較して記憶の衰えに関しての自覚があるかということに関連した因子であり、第 2 因子である「記憶の失敗感」は、自分がしてしまった記憶のミスに対しての自覚に関連した因子であり、2 因子構造が適切ではないかと考えられた。また、MSSC との関連についての検討では、記憶の失敗感因子の方が、記憶の衰え感因子よりも影響していると考えられ、記憶の失敗感が高い人ほど記憶の自信度が低いという可能性が考えられた。

主要引用文献

島内晶 (2012) 高齢者のメタ記憶における自信度および虚偽記憶との関連性: サクセスフル・エイジングの観点から。行動科学, 50, 199-206.

Shimanouchi, A. & Sato, S. (2009) Age effect on memory self-confidence. 19th Congress of The International Association of Gerontology and Geriatrics, Paris, France.

(本研究は平成26~28年度科学研究費補助金 (課題番号 26380944 研究代表者 島内晶) の助成を受けた。)